

実践力を育成する道徳教育授業の展開 地域連携で創る『道徳教育論』 2

池田裕子

●要約

本稿は、昨年度から始まった教職課程科目「道徳教育論」における実践性重視の新たな取り組みについての第二回目の報告書である。この科目については、昨年度から、中学校の校長を勤められていた平間信雄氏と筆者の2名で担当している。昨年、本大学紀要No.10では、平間氏が第一回目の報告として「地域連携で創る『道徳教育論』」を発表した。

第二回目となる今回の報告では、今年度に行った授業の運営についての検証を行い、来年度に向けたより効果的な授業づくりにつながる課題を明らかにした。

●キーワード

実践的な授業

外部講師

自作教材

「道徳」の教育実習

はじめに

2009(平成21)年度より、稚内北星学園大学教職課程科目の「道德教育論」は、より実践性を重視した授業へと様変わりした。周知のように、2008(平成20)年の3月に学習指導要領が改訂され、道德教育の重視が改めて確認された。道德教育推進教師を中心に、指導体制の充実を図るということである。

戦後、日本において「道德の時間」が特設されたのは、1958(昭和33)年8月の学校教育法施行規則の一部改正による。同日、小学校と中学校の「学習指導要領道德編」が公示され、10月には学習指導要領が全面改訂されている。これより道德は、毎学年毎週一時間、学級担任の教師によって指導されることとなった。

「道德の時間」の特設まで、学校における道德教育は、学校の教育活動全体を通じて行うことが基本とされてきた。しかしながら、同年3月に出された文部省通達(「小学校・中学校における道德の実施要領について」)では、従来の在り方について、「広くその実情をみると、必ずしもじゅうぶん効果をあげているとはいえない」との評価がなされている。そこで、「このような現状を反省して、ふじゅうぶんな面を補い、さらにその徹底をはかるため」、新たに「道德の時間」を設けるとの説明がなされた。「道德の時間」は、「児童生徒が道德教育の目標である道德性を自覚できるように(中略)他の教育活動における道德指導と密接な関係を保ちながら、これを補充し、深化し、または統合して、児童生徒に望ましい道德的習慣・心情・判断力を養い、社会における個人のあり方についての自覚を主体的に深め、道德的実践力の向上を図る」ねらいの下で特設されたのである。

この基本的な方向性は、現在においても変わりはない。

この、学校教育への「道德の時間」導入以降、文部省によってさまざまな奨励策が検討されてきた。近年では、2002(平成14)年に『心のノート』が導入されたが、2009(平成21)年8月の政権交代以降は、民主党政権による事業仕分けで印刷・配布業務廃止の方向性が提示された。「道德の時間」をめぐる議論は、「重視」では一致しつつもその方法論で齟齬が生じている。

このような状況下にあって、教師はどのような「道德の時間」を創ることができるのか。現場で迷うことなく、「道德の時間」に取り組むことのできるような教師を養成したい。

こうして、2009(平成21)年度より、稚内市で長年校長職を勤められ、同年4月より稚内市教育相談所の所長となられた平間信雄氏をお招きする形で、稚内北星学園大学の新しい「道德教育論」の試みがスタートした。

実施1年目の授業の概要については、『稚内北星学園大学紀要』第10号に「地域連携で創る『道德教育論』」として掲載されている。初めての試みということもあり、試行錯誤の連続であった。学生たちの努力の結果もあり、成功を収めることができたものの、反省点が多く見いだされたのも事実であった。

今回の報告は、第1回目の反省を踏まえて行われた稚内北星学園大学の新しい「道德教育論」がどのように進化したのかを検証するものである。

なお、これ以降、報告文中に登場する人物の敬称は省略させていただく。

I. 稚内北星学園大学「道德教育論」の課題

この授業では、「現場で迷うことなく『道德の時間』に取り組むことのできるような教師を養成す

る」という、大きな目標を設定した。

この目標を達成するには、どのようなシラバスが適切であろうか。

教師として「道徳の時間」を行うためには、日本における道徳教育の歴史的な背景と現代における課題については押さえていて欲しい。加えて、現場に入った際に、求められる水準の授業を行うためには、実習を含む演習の時間は是非とも潤沢に確保したい。しかしながら、全16回という短い時間の中でこの2点を達成することは、非常に厳しい要求であるといわざるを得ない。

また、物理的な条件として考慮しなければならないこととして、道徳の教育実習を1講の時間内で完結させるには、稚内北星学園大学からの移動時間を極力短縮することが必要であった。前回、稚内市立西小中学校の全面的なご協力があった初めて実現した道徳の教育実習であったが、交通機関の問題から、再度お願いすることは断念せざるを得なかった。

第2回目となる2010(平成22)年度の「道徳教育論」では、大学に隣接する稚内市立潮見が丘中学校に協力校となっていたことができた。同校グラウンドと本大学の敷地の間には、「近道の階段」が設けてある。学生は、この階段を使って同校に通い、学習支援を行ったり、運動会に参加したりと楽しく交流をしていた経緯があった。幸い、時間帯の調整も可能である。

また、「『道徳教育論』の5つの目標に」については、前回は概ね踏襲して、その意義を学生に周知させることに意を用いた。

1. 道徳教育の核となる魅力的な道徳教材の開発と活用に挑戦する
2. 優れた実践に学び、稚内の地域性を生かしたシラバスを作成する
3. 学校現場の優れた教育実践家や関係者の支援を得て、授業を地域に開く
4. 学生自身のボランティア活動を醸成し、子ども理解が深まる計画をつくる
5. 教材作成・指導案作成・研究授業を通じて学生の「チーム力」を養成する

こうして、以下のようなシラバスを作成した。

【資料1】 稚内北星学園大学「道徳教育論」シラバス

第Ⅰ部 道徳教育の過去と現在

- 第1回 ガイダンス (道徳教育の意義)
- 第2回 戦前の道徳教育
- 第3回 戦後の道徳教育
- 第4回 現代の道徳教育
- 第5回 学習指導要領の確認

第Ⅱ部 道徳の授業作りと模擬授業

- 第6回 道徳の授業づくり(1) 昨年度の取り組みを参考にして
- 第7回 道徳の授業づくり(2) 教材作成、選定のポイント
- 第8回 道徳の授業づくり(3) 潮見が丘中学校道徳教育推進教師による道徳の授業と留意点の指摘
- 第9回 道徳の授業づくり(4) 教材提示 (各学生選定の教材をプレゼンテーション)

- 第10回 道徳の授業づくり(5) 教材決定・役割分担
- 第11回 道徳の授業づくり(6) 教材研究
- 第12回 道徳の授業づくり(7) 指導計画の立案
- 第13回 道徳の授業づくり(8) 授業の組み立て
- 第14回 道徳の授業づくり(9) 模擬授業リハーサル
- 第15回 模擬授業実施と研究協議 (於：潮見が丘中学校)
- 第16回 振り返り (模擬授業の反省を踏まえて指導計画の改善、レポート提出)

第Ⅰ部「道徳教育の過去と現在」では、日本における近代教育のはじまりから新学習指導要領の実施に至るまでの経緯を学んだ。道徳を教えるにあたり、その歴史的経緯を踏まえることで、現在課題とされている道徳教育のあり方についての理解を深めようという考えからである。いわば道徳教育の「理論編」にあたる全5回の講義ではあったが、「実践編」にあたる第Ⅱ部を11回というのは、時間不足の感がやはり否めない。次回以降の課題として、「理論編」を縮小することを検討する。

第Ⅱ部「道徳の授業作りと模擬授業」では、教材を自作とするのか、既製の教材からの選択とするのかが大きな問題となった。時間配分のことを考えると、既製の教材を使用するという考え方も担当者の頭をよぎったが、「自信をもって道徳教育に取り組むことのできる教師を育てる」という目標を達成するには、やはり自作教材で臨むのが良いという結論に至った。そして、全受講者が自作教材を提出した。大変な作業ではあるが、この過程を経ることで、「道徳」の授業づくりに対して自信の持ち方が違ってくる。「実践編」では、前回と異なり、自作教材を作成する時間を設けることをせず、よい教材とはどのようなものかを皮切りに、極力2名の担当者を交えて学生全員が意見交換をする機会を多く設けることとした。

プレゼンテーションの場を何度か用意したことも今回の授業の工夫である。これにより、学生は常に自分の作品の妥当性を他者も交えた検証の場で問われることになった。この作業を通じて学生のなかに「教える側の眼」が生まれ、それが自身の「伝えたい」という気持ちと相俟って、教材が進化していく効果をねらったのである。

このことは、たんに道徳の教材を創るという段階にとどまらず、学生自身にとっての道徳教育、つまり、学生が自己と向き合う貴重な経験を重ねる契機となった。これは、前回同様、本講義の貴重な副産物であった。

また、前回の反省を踏まえて、リハーサルを時間内に設定した(第14回)。ここでは、協力校である潮見が丘中学校、教材を作成した学生自身の働きかけによる近隣中学校、本大学教職課程担当者複数名、昨年の「道徳教育論」受講生数名が参観に訪れ、忌憚のない意見を述べ合った。有り難いことに、全ての意見がよりよくなるための修正を求めるものであり、この場での確認が本番に際して非常に有効に働いた。

次回に向けた課題としては、「実践編」の再構成と時間増の検討があげられる。

Ⅱ. 自作教材完成までの道のり

第Ⅱ部「実践編」第1回目のガイダンスを経た第2回目は、潮見が丘中学校の安彦海明(うみあけ)

先生による、道徳授業「出会いに感謝」であった。

この授業は、「判断（選択）」をメインテーマとして、安彦先生の過去を題材にしながら、その時々安彦少年の進路選択に関わる「判断」を追体験し、自身と重ね合わせて考えるという展開であった。

この授業から学んで欲しい観点は二つあった。一つは、学生たちが自身を振り返り、毎日が選択と判断の積み重ねであるということを確認すること。もう一つは、授業を客観視して、「道徳」の授業を創るにあたり、どのような点に注意すべきなのかを見つけ出すということである。

しかしながら、担当者の期待はいささか過大だったようである。結論からいえば、学生は、前者に終始してしまった。それはこういうことである。今回の授業のテーマが学生たちの現在進行形の悩みとあまりにも合致していたために、この授業に強く引き込まれ、客観的に「指導者目線」に切り替えることができなかった。この点を克服するためには、次回は実際に中学校で行われている道徳の時間を参観させていただくようにするのがよいと考えている。

第9回は、各学生が、どのようなテーマで教材を作成するのかの原案を発表する機会とした。まだ固まっていない文字通り原案の段階であるが、テーマとストーリーの概略を聞き、皆で討論して、次第に教材イメージを固めた。

これ以降、教材が完成次第、電子メールで送信するよう伝えたと、6月3日には全ての教材が届いた。大急ぎで担当者である筆者が各作品を添削し、修正点を学生と協議のうえ、次の授業に間に合うようにもう一人の担当者に電子メールで送信した。直ちに予め撮影しておいた学生の顔写真を入れた教科書編集作業に入った。そして、『2010年度道徳自作教材六篇』という名称の大学オリジナル道徳教科書No. 2が完成した。

以下は、その概要である。

【資料2】『2010年度 道徳自作教材六篇』目次

「道徳」自作教材第二集の発表に寄せて 稚内北星学園大学 教職課程担当 池田裕子	
道徳自作教材六篇の紹介	
死の意思と生の意思	池田 拓郎
ドラえもん おばあちゃんの思い出	金子 大軌
約束	芝田 涼
ともだち	土生 勇
人の心の動き	三浦 遼平
みんなで学ぼうメールの使い方	渡部 卓也

それぞれ、学生の個性が出た作品であった。作品とその解説、ねらいなどを記した小レポートを同時に提出してもらった。それらを総合的に判断したうえで、昨年同様、1つの作品を選定していただくこととした。選定は、模擬授業の実習校である潮見が丘中学校の校長島田勇先生にお願いした。

Ⅲ. 模擬授業用教材の決定と役割分担

自作教材を完成させ、担当者2名を交えた学生同士の討論を終えたところで一つ目の山は越えた。次からは、いよいよ、7月20日(6校時目14時35分から15時25分まで)に決定した模擬授業本番に向けての作業に取りかかる。

第10回目では作品の講評と選定結果の発表を行った。対象者である中学3年生に向けた教材として適切であるということで、三浦遼平の「人の心の動き」が選ばれた。選定理由は、教材全体に流れる観点、「自分の心もこんな風に変わるができる、自分も捨てたものではない」という自己肯定感が良く出た優れた作品であるということであった。

以下にその完成版を掲載する。

【資料3】2010(平成22)年度模擬授業採用教材「人の心の動き」

稚内北星学園大学3年 三浦 遼平

中学生の頃、一人の女の子が不登校になった。

その子とは小学校時代から同級生だったが、話もほとんどしたことがなく、どちらかと言えば関係は薄かった。

だから別に、不登校になろうと構わなかった。

他の生徒もあまり話題にも出さなかったが、心配していた者もいれば、僕と同様にどうでもいいと思っていた者もいただろう。

ただ、担任の先生は違った。

口に出して言う事はなかったが、不登校初期の頃からその子の家に通っていたらしい。

普通の授業の準備、部活動に職員会議などで疲れていたにもかかわらず、だ。

先生の話によると、その子も学校には行きたいと言っているらしい。

けれども玄関を開けて外を見るだけで世界がぐにやりと曲がり、吐き気がすると外に出るのも無理だと言う。

その話を聞いて大半の生徒はイジメだと感じ取っていたと思うが、先生は決して不登校の原因がイジメとは言わなかった、先生は目に涙を浮かべていた。

やがて先生とその子の努力が実ったのか、外に出られるようになった。

学外でも姿を見かけるようになり、クラス内でも度々話を耳にするようになった。

その事を先生も聞きつけたのか、HR中に

「学校外で会っても普通に接してくれよ、今の成実を外に出るのも必死なんだ。もし「学校に来なよ」とか学校の事を意識させたらまた外に出られなくなるかも知れないからな」

と、鬼気迫る表情で話していたのを覚えている。

中学2年の2学期終業式後、先生がクラス写真を撮るとクラス全員で外に向かうように指示を

出した。てっきり玄関口で撮影すると思っていたが、先生について歩くとその子の家の前に来ていた。

先生が呼び鈴を鳴らすとその子が外に出てきた。

—————初めてクラス全員でクラス写真が撮れた。—————

こんな当たり前のことで胸がジーンときたのを覚えている。

それから3学期が始まったが、その子はやはり学校に来ることはなかった。

3年生になった春先、先生がその子のお話をします。

「今はまだ学校に来られないけど、修学旅行には行きたいと言っているんだ。みんなは別に構わないよな？」

何人かしか返事はしなかったが、みんなは当たり前だろうと思っていただろう、それこそ表情を見ていれば、だ。

修学旅行当日、その子は同じクラスの列に並び、バスに乗った。

修学旅行も過ぎてしばらくすると、その子は保健室登校という形で学校に来ることが出来た。

先生は、

「みんなが普通に接してくれたから、成実も勇気を出して学校に来られるようになった」と鼻声で言っていた。

2学期も終わろうとする頃、授業の最中に先生が話があると言って教室にきた。

またあの子のお話かと思っていたが、違った。

その子自身が教室に入ってきたのだ。

その子のお話は正直覚えていないが、話し終えたクラス内のムードはドッとわきあがったのを覚えている。僕自身も内心嬉しかった。

最初は全く興味がなかった、どうでもよかったのに、その時は本当に嬉しかった。

人の心というのは、たとえ自分の心であっても人の言葉や行為によって思いもよらない変化をするのだと感じた。

ここから、模擬授業(本番)までのタイムスケジュールと各学生の役割分担の確認作業に入る。

1. いつまでに、何をすればよいかを確認する。

2. 各グループの詳細な役割を決定する。

Aグループ(教案作成)

リーダー 渡部卓也ほか

- ・教案作成
- ・教具リストの作成
- ・教具の準備

Bグループ (広報)

リーダー 池田拓郎ほか

- ・ポスター作成
- ・稚内北星学園大学ホームページ掲載記事 (案内と結果報告) 執筆
- ・生徒配布用アンケート作成
- ・招待状・礼状の作成
- ・各関係方面へのポスターと案内状の発送 (7月2日)
- ・実習校である潮見が丘中学校3年1組への代表あいさつとポスター案内状の持参
(7月14日1校時に間に合うように8時10分頃に校門前に集合)

Cグループ (授業展開)

リーダー 芝田涼ほか

- ・発問・板書構成考案
- ・写真撮影
- ・生徒用、授業者用の名札準備

このようなグループ作業では、学生が適切なリーダーシップをとれるのか、締切を見据えながらの確実な作業運びを行うことができるのかが問われる。事実、毎日大学での活動を行う合間を縫って、細かで煩雑な手配を進めていかなければならない。これは、一見、「雑事」のようにも思えるが、実際は、この種の手配は教育現場のみならず、社会人として自立していく際に必須となる重要な仕事の一つである。本大学の「道徳教育論」では、こうした実務的な作業も学生が行う。思い通りに行かない際に、どのように調整するのか。このことは、仲間うちでのコミュニケーションを図るための絶好の機会である。さらに、この授業の場合、外部との連絡・調整作業が加わる。そこに甘えは許されない。学生は、社会人としての対応を嫌でも意識せざるを得なくなる。

Ⅳ. 広報の「要」ポスターの完成

稚内北星学園大学で数学と情報の教員免許状を取得しようとする学生は、情報メディア学科に入学する (地域創造学科では情報教免のみの取得となる)。

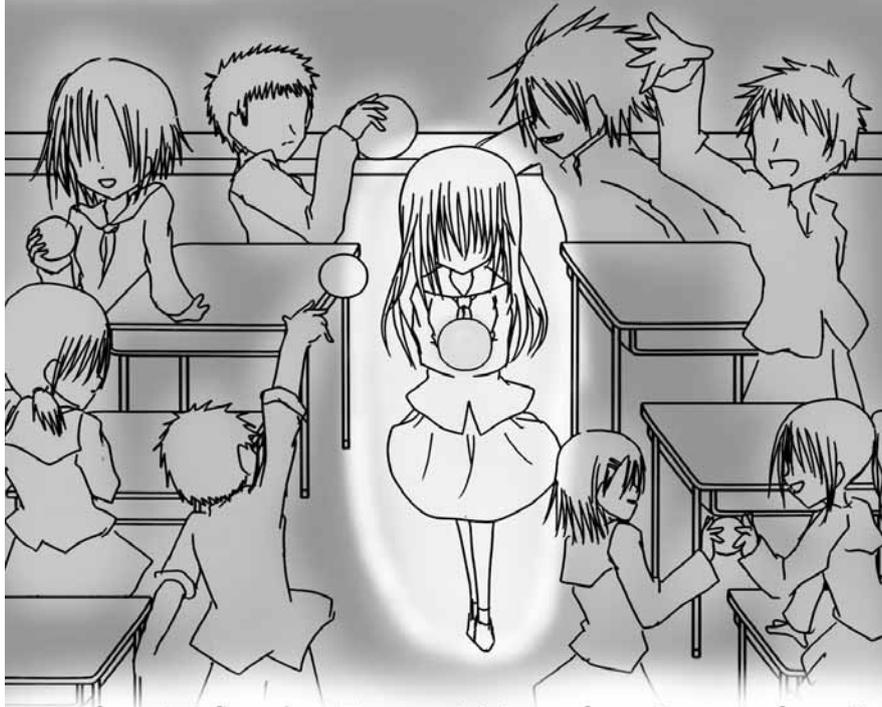
今回の「道徳教育論」受講生は全て情報メディア学科の学生である。この学科で学ぶ多くの学生は、ホームページの作成やさまざまなソフトを活用して、ポスターやリーフレット等を作成することが容易にできるようになる。

こうした学科の特色を生かして、広報グループリーダーである池田拓郎はポスターとリーフレットを完成させた。

【資料4】模擬授業に向けて学生が作成したポスター兼チラシ

稚内北星学園大学 教職課程履修学生による研究授業

人の心の動き



日時：平成22年7月20日(火) 14時35分～15時25分

場所：稚内市立潮見が丘中学校

授業者：池田 拓郎 金子 大軌

芝田 涼 土生 勇

三浦 遼平 渡部 卓也

クラスの皆が手にして、投げ合ったりしているボールは、彼等の心を表現している。その中で所在なげに立ち尽くす一人の不登校になってしまった女子生徒が持っているボールは、誰にも受け取られることはない。誰一人関心を寄せてはいないように見えるクラスの中に一人だけ彼女を気にかけている男子生徒が筆者の三浦少年という解釈である。

彼女の不登校を背景として、その事実によれ動く三浦少年の心のありようがこの作品のテーマである。

模擬授業の前段階として、生徒たちの意欲を高める一つの仕掛けである。このポスターとチラシを持参して代表者が挨拶をすることで、生徒たちが学生を身近に感じ、授業への協力を促すという効果も期待できるのである。

V. 教案の完成と模擬授業本番

道徳授業指導案は、渡部卓也が作成した。ここでは、どれだけ教材を研究して理解を深めたかが問われる。

【資料5】道徳授業の指導案

作成：稚内北星学園大学教職課程 渡部卓也

日時：平成22年7月20日 14時35分～15時25分（6校時）

場所：稚内市立潮見が丘中学校 3年1組

学級：男子17名 女子14名 計31名

1. 主題

自己肯定感を育てる。(中学校学習指導要領1-(5))

2. 使用教材について

(1) 使用教材

稚内北星学園大学発 道徳教科書『人の心の動き』 三浦遼平 著

(2) 教材の内容

教材は著者である三浦遼平の中学校のときの実体験を基に作られたものである。不登校のクラスメイトに対して始めは無関心だった三浦少年が、様々な経験を経て心境が良い方向に変化していくというものである。なぜ三浦少年の心境が変化していったのか、また誰の存在によって心境が変化していったのかを考えていきたい。

3. 主題設定の理由

(1) 指導内容

学習指導要領の第3章1-(5)に「自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する」という項目がある。

近年、自殺、ニート、うつ病等自己の精神に関わる社会的問題が数多くある。これらの社会的な問題は、自己を否定的にとらえていることが原因の一つであると考えられる。

これらの問題を解決するためには、自己を見つめなおし、自己を肯定的にとらえることによって自己の向上を図ることが必要である。本時の授業を通じて自己肯定感を持つことが出来るよう指導していきたい。

(2) 発達段階への配慮

中学校3年生は思春期の最中で、他者の行動や言動に対して些細なことで腹を立て、些細なことで傷ついてしまう精神が不安定な時期である。不安定な時期の中、様々な心の変化とともに大人へと成長していく。教材を読み疑似体験しながら良い心の変化を通じて「自分もこんなふうに変わるんじゃないか」という気持ちを持たせるよう配慮した。

4. 本時の目標

(1) 教材を読んで、自分の気持ちを文章にすることができる。

(2) 教材を通じて心の動きに気付くことができる。

(3) 自分の感じたことを発表することができる。

5. 教師の注意点

- (1) チーム授業だということを意識し、チームプレイを心がける。
- (2) 全員が参加出来る授業を目指す
- (3) 発言するときはスローペース
- (4) 生徒の発言を広げる
- (5) 生徒の発言には深くうなずき、生徒の発言を否定しない

6. 授業の役割

- (1) メインT 三浦、芝田
- (2) サブT 渡部
- (3) 板書 池田
- (4) 写真撮影 金子
- (5) プリント配布 土生
- (6) 挨拶 芝田
- (7) 名札の用意 土生

7. 授業案

	教師の活動	生徒の活動	時間(分)	留意点
導入	全員が教壇前に整列し、チャイムを待つ 始めの号令 代表挨拶(芝田) 自己紹介(全員) 発問「人の心は動くか」 教材を掲示する	号令 拍手 集中して聞く 答える	10分	自己紹介・中学校の話は短くする(1分程度)
展開	<では三浦先生はどのような中学校生活を送ったのか> 芝田から三浦へバトンタッチ 僕の心が動いたと思う部分にアンダーラインを引かせる 教材を読む(三浦) プリントの記入を促す(10分程度) 三浦から芝田へバトンタッチ 発表させる 1.どこにアンダーラインを引いたのか 2.なぜ自分はそう思ったのか 三浦少年が心動いた瞬間を板書する(池田) 同じところにアンダーラインを引いていたら挙手させる 発問「なぜ僕は心が動いたのか」	教材を開く 各自アンダーラインを引く 記入 記入した内容について挙手して発表 挙手	30分	聞き取りやすい声量で、抑揚をつけて読む 机間指導(全員) 記入したか確認 挙手が無い場合指名する
まとめ	まとめ 教壇前に整列(全員) 代表挨拶(芝田) 1.一生懸命勉強してくれたことへの感謝 2.感想文記入のお願い 終わりの号令をさせる	感想文記入 号令	10分	感想文回収

8・授業の評価

- (1) 教材を読んで、自分の気持ちを文章にすることができたか。
- (2) 教材を通じて心の動きに気付くことができたか。
- (3) 自分の感じたことを発表することができたか。

9・必要な教具

- (1) 教材『人の心の動き』
- (2) 解答用プリント



【写真1】緊張の面持ちで当日生徒たちの前で挨拶する学生一同

Ⅵ. 振り返り

ここでは、模擬授業と事後の出席者による懇談会での話し合いを踏まえ、授業を受けた生徒たちのアンケートを題材に全体総括を行った。

【資料6】アンケート集計結果

- ・実施日 2010(平成22)年7月20日
- ・回収日 2010(平成22)年7月23日
- ・出席 31名(ほか参加者一部下記)

稚内市教育委員会教育長 手島孝通氏 同教育部長 中澤敏幸氏 稚内市教育委員会教育委員長 井上幹雄氏 同教育委員 大山隆氏 同教育委員 今田雄一氏 北海道教育庁宗谷教育局 宮田茂氏 同 渥美氏 潮見が丘中学校校長 島田勇氏 稚内東中学校校長 中尾忠氏 稚内中学校校長 菅野剛氏 稚内西小中学校教諭 川越岳人氏 潮見が丘中学校教諭 安彦海明氏 稚内北星学園大学学部長 張江洋直氏 稚内北星学園大学教職課程4年 佐藤徹章氏 同 細川佑太氏 ほか

本日は、私たち稚内北星学園大学学生チームによる道徳授業「人の心の動き」にご参加くださ

いまして、本当にありがとうございました。

最後に、アンケートにご協力ください。それぞれの項目について、5点満点で何点になるでしょうか。をつけてください。

1. 教材はわかりやすかったですか？

5点	14/31	45.2%	}	27/31	87.1%
4点	13/31	41.9%			
3点	2/31	6.5%			
2点	0/31	0.0%			
1点	1/31	3.2%			
無回答	1/31	3.2%			

2. 質問は答えやすいものでしたか？

5点	11/31	35.5%	}	20/31	64.5%
4点	9/31	29.0%			
3点	7/31	22.6%			
2点	2/31	6.5%			
1点	1/31	3.2%			
無回答	1/31	3.2%			

3. 全体を通してこの授業を評価するとしたら何点になりますか？

5点	16/31	51.6%	}	27/31	87.1%
4点	11/31	29.0%			
3点	2/31	6.5%			
2点	0/31	0.0%			
1点	1/31	3.2%			
無回答	1/31	3.2%			

4. その点数をつけた理由を教えてください。特に、もっとこうの方が良いという点があれば是非教えてください。

- ・全体的に楽しかったので。
- ・とても充実していておもしろかったし、また、教えてもらいたいです!!
- ・これからもがんばってください。
- ・話の内容も面白かったし、イラストがあったのでそうぞうしやすかった。かいぜん点はとくにないです。
- ・書く時間を、少なくすれば、もう少し話せたかなーって思う。
- ・話しばっかり。
- ・もうちょっと、自分の理想をおしつけてもいいと思います。

- ・何を伝えたいのかいまいちよくわからなかった。国語の授業かと思った。
 - ・意味がわからなかった。
 - ・笑いを少しとった方がよいと思う。
5. 最後に、本日の授業のように、あなたの心が変わった経験があれば書いてください。
- ・不登校には、理由があるし、けどその理由を先生が生徒にいわないのがいいはんだんだと思っ
たし。私もいじめていたから、その子の気持ちがわかった。
 - ・私にはありません。我が道を行くなので。
 - ・今のところはないけどこれからは良い心を持てるようにします。

—— 【資料7】 アンケートより生徒の読み取り部分を一部抜粋 ——

設問1. 「僕」の心が動いた瞬間だと思うところにアンダーラインを引きなさい。

設問2. あなたは、「僕」の心がなぜ動いたのだと思いますか。その理由を書きなさい。

(1) A さん

最初は、話したことがなくて、関係は薄く、おそらくどうでもいい人達に流されていたが、担任の先生の努力や本人の頑張りを、「僕」が見ていて、初めてクラス全員でのクラス写真が撮れたことで「僕」の心にも変化ができた。

最初の関係が薄かったところが、心が動いた一つの理由だとおもう。話しが進むにつれて、女の子の世界観が、動いた。それと同時に「僕」の心も動いた。

(2) B さん

先生が不登校になった生徒の家に行ったり、クラス全員に呼びかけたり、生徒のために一生けん命になってる先生を見たから気持ちが動いたと思う。

同じクラスの一人としてやっぱり学校に来てくれたことは嬉しかったと思う。その子が頑張っ
て教室に入ってきたことも「僕」の心にひびいたんじゃないかと思う。

(3) C さん

わからない。クラスなんて別に関係ないのに、嬉しくて(?)胸がジーンときたのかわからない。
国語の作文的には、これがせいかいだと思った。「撮れた」って、やっと...みたいな感じだっ
たから。喜びがにじみでてる感じだから。

(4) D さん

担任の先生のその子への気持ちが、まわりの人や「僕」につたわったから。

先生の、その子が学校にこれるようにと、“家に通うこと”や、“クラス写真の時の事”や、他の
生徒に言った言葉、そして、修学りょこうや外に出られるように努力しているその子のがんばり
をかんじたから。

(5) E さん

最初はどうでもいいとすら思っていたのに、たかがクラス写真をとれただけで胸にジーンとき
てるんだからここだと思う。

それに「僕」の心が動いたのは「ここだけ」じゃなくて、「ここから」だと思う。

クラス写真のこともそうだし、修学旅行のこともそう。その子自身が教室に入ってきた時だっ

て、どうでもいいと思っていたのなら、反応をしなくてもいいし、もりあがるのも約一部だけだ
と思う。

それなのにクラスじゅうでムードがわきあがり、「僕」自身の中身も嬉しくなっているので、「僕」
だけじゃなく、クラスメイトやあの子の心も動いてる瞬間だと思う。

先生の発言や行動によって、だと思う。それと先生があの子の話をしていたことによって、少
なからず興味や関心といったものがうまれたので、クラスメイトとしての意識や、クラスとして
の雰囲気がよくなっていったので、素直に感動することができたのでは。

ここからは想像でしかないのだが、

先生の発言や行動を見て、「どうして、つかれているのに人のためにここまでできるのだろう。
僕は考えたこともないし、ましてや発言や行動などできた、ためしがないのに…」
という考えにいたり、あの子のことについて少しずつ考えるようになったのでは？と思う。

(6) F さん

ぼくはどうでもいいと思っていたが先生は違って、とても心配していたから。

クラス全いで写真をとることはふつうなのに、ジーンときたから心が動いていると思う。

(7) G さん

「胸がジーンときた」とゆう事は、すくなく成実に対して関心をもったとゆう事なので。
今までかけていた1ピースがようやくうまったから。

アンケート集計結果を受けた学生による自己評価（アンケートの集計結果・生徒の読み取りから何が言えるのか）

(1) 教材のわかりやすさ

概ね好評価であったが、僕の「心」の描写をもう少しすると良かった。

(2) 質問のわかりやすさ

板書をして、完結させてしまった。板書をしたことで満足してしまい、その内容を生かした展開
ができていなかった。もう少しかみくだいた質問をするべきであった。また、授業者は、生徒の答え
にもっと向き合い、ふくらませると良かった。

最後にもう一度、「人の心は変わると思うか」という問いかけをしたら良かったのではないか。

(3) 全体評価

生徒との距離感をもう少し考えるべきであった。今回は、言葉遣いなども含めて近すぎた。考え
る時間を多くとりすぎたため、途中で授業が間延びした印象となってしまった。

(4) 生徒の読み取り

もっと生徒に話をさせるなど、生徒の活動に重点を置くと良かった。

全体を通してのフィードバック

教材そのものの趣旨は概ね生徒たちに伝わったようであるが、これを、より「道徳」の授業として
完成させるためには、教材理解を深めることが重要であった。今回、各学生の教材理解が必ずしも一
様ではなく、また、自信のなさも手伝って、結果を収斂させるまでには至らなかった。当日の授業の
手順も含めたこのずれが、発問の内容やタイミングなどに影響を及ぼし、結果として授業全体の運び

に及んでしまった。

このことについては、授業を受けた生徒からも「もっと押しつけてもよいのでは」と指摘をされた。参観した教育委員の方からも、「やはり、どこか一点に収斂させるところがあっても良いのでは」との意見をいただくこととなった。生徒の多様な意見を尊重しようとするあまり、焦点のあいまいな展開になってしまったことは否めない。

加えて、生徒それぞれの豊かな読み取りをすくい上げて、それを授業に活用するということは、課題ではあるが、これはもとより高等技術であり、今後現場において実践経験を積みあげることで身につけていくことになるのだろう。

ともあれ、今回の試みを前回と比較してみると、リハーサルの時間を設けたことによって、教材研究の重要性を学生が認識したという点が進歩であった。教材と向き合う時間をいかに確保するか、また、学生同士の事前打ち合わせをしっかりと行うというコミュニケーションのとり方が課題として残された。

Ⅶ. 学生はこの経験から何を得たのか

【資料8】学生の感想文

3年 芝田 涼 (授業者)

まず、道徳教育論の授業を通して学んだことについて述べる。それは、「学びあいの姿勢」である。

これは授業中に先生がおっしゃっていたことである。このとき私は、潮見が丘中学校で授業をすることを想定していたので、「学びあい」とは「生徒」と「先生」の関係を示していると考えていた。しかし、それだけではなかったのである。

研究授業の事前発表の際、本学の4年生も2人来られていたのだが、そのとき非常に前向きな言葉をかけていただき、とても気持ちが楽になった。そのとき私は、「学びあい」とは生徒と先生だけの関係ではなく、その他支えてくれるすべての人と学びあうことができるということ学んだ。

次に、実際に私が担当した仕事について述べる。

私は主に、当日の授業の進行役を務めた。いわゆる「先生」の仕事である。これについて個人評価、注意した点、反省点などを含めて考えてみたい。

個人評価については、私は100点中10点だと考えている。良かったことはとりあえず授業が終わったことくらいだった。生徒がせつかく意見を出してくれてもそれを膨らませることができず、力不足を痛感した。また、私が意識しようと考えていたことに、生徒との間に壁を作らないようにすることを考えていたのだが、これも意識しすぎて裏目に出てしまった。生徒との距離感を近くしすぎてしまい、バランスをとることに失敗してしまったからである。

これら以外にも反省点はあるが、それらを少しずつ改善していきたい。

続いて実際に道徳の授業をした感想だが、一番難しかったのは教材理解についてである。というのも、この教材は私が作ったものではないからだ。この教材を作ったのはチームの他のメンバー

で、指導案を作成したのも他のメンバーである。つまり、題材を作った人と指導案を作成した人、授業をした人がすべて違うのである。今年はこの意思統一が十分ではなかったため、来年の授業者にはこれらの点に注意して授業をしてほしい。

最後に、これらの経験をどのように活かすかということについてだが、まずは来年の教育実習に活かしたい。私は少人数指導に関しては経験があるが、一斉教授は初めてだったので、声の大きさ、生徒との距離感、効果的な問の作り方、生徒の発言を引き出し、膨らませる能力などすべてのことが初めてだった。来年の教育実習までにこれらのうちの少しでも改善し、生徒と一緒に考える授業を展開できるように努力していきたい。

3年 三浦遼平 (教材作成者)

生徒たちの前に出て授業をする、何もかもが初めてでプレッシャーにより喉がカラカラに渴いたのを覚えている。それでも私よりも生徒たちと話し、授業進行を行っていた仲間と比べると緊張は格段に低かっただろう。

さて、多分他の学生たちは授業についての事を書くと思うので、私は教材について重点的に書いていきたいと思う。

今回は、たまたま私の昔話が教材として選ばれた。正直な話、なぜ選ばれたのかよく分からなかった。この教材の「僕」の立場は、他の学生たちの実話に比べると「何もできなかった、しなかった」人間としてのスタンスであったからだ。何しろ頑張ったのは当時の私の担任である。

そして第一稿のあとでその当時の担任のもとへ向かった。

それから時系列の整頓、その時の情景を思い出しながら、あるいは大学の教員方と修正を重ねながら原稿が出来上がった。

本来なら一人で修正出来てもよさそうなものだが、さすがに事も事なので一人でというよりは万全を期する意味で極力一人での修正は避けた。

そして実際に大勢の生徒と先生方の前で音読をする。

私がこの授業で行ったのはこれだけなのだが、非常に緊張した。最低でもつかえないように、走りすぎないようにということを念頭に置き、そのまま司会進行へとバトンを渡した。

それからは、自分が授業者ならどう動くかを頭の中で投影していった。

実際に授業者として生徒たちの前で話すことは、大変緊張を強いられることではあったが、生徒たちが素直で授業全体が比較的スムーズに流れたので安心した。改善点をあげるとすれば、多少のメリハリをつけて構成をしっかりと作り、全体がわかる、言いたいことが伝わる授業を目指すということである。

この経験から私は、教師を目指すということにかかわらず、少なくとも何かを伝える機会を得た時には、自分自身の文章力と説明の力で伝え切ることができるようになりたいたいと思った。

3年 渡部 卓也 (教案作成者)

私たちはゼロから道徳の授業を作り上げました。教材作りに始まり、学習指導案作成、そして授業。始めから最後まで多くの課題にぶつかり、悩み、改善していきました。

特に私が担当した学習指導案作りでは、大変多くの時間を費やしました。その分、私なりに納得の出来る指導案を作りあげることができました。

また、授業を通じて感じたことは以下の三点でした。

- ・教師と生徒の間
- ・授業の時間配分
- ・チームでの取り組み

一点目の「教師の生徒の間」は、私は近かったと考えます。親近感の湧くという点では近い方が良いのかもしれませんが、しかし、生徒に友達のような感覚を持たれてしまうと生徒は教師の話し聞いてくれない場面も少しはあったと思います。適切な間を取るのはとても難しいことですが、日ごろのボランティアや、教育実習等で身につけていきたいです。

二点目の授業配分は、教師が話す時間、生徒に書かせる時間が長かったと考えます。それはアンケート等でも出ていました。先ほどあげた二点の時間を減らし、生徒の考えを発表させる時間を増やすことによって生徒への理解が深まると私は考えます。

三点目のチームでの取り組みは、チームでの教材理解が足りなかったと感じています。なぜなら個人個人の理解が、本来ひとつにまとまっていなければいけないものがまとまっていなかったからです。またチームで授業をする機会があるなら、十分に時間を取って話し合う場を多く作らなければならないと考えます。

今回の経験は、私にとって多くの改善点を浮き彫りにするととても良い経験でした。この、多くの改善点というマイナスの面をプラスに持っていくことによって、より良い教師になっていくと考えます。

今回は、このような貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

池田 拓郎 (ポスター作成者)

先日7月20日、私たち稚内北星学園大学教職課程履修学生(自称・教職チーム)は、道徳教育の研究の一環として、潮見が丘中学校様から貴重な場をお借りして授業を行った。

題材は「人の心の動き」。考案者は同チームの三浦遼平氏で、登場人物の女の子と「ぼく」の心の変化を描く、シンプルで、なおかつ中学生にとってはとても近しく馴染みやすい題材だったのではないかと思います。

各々この教材をよりよくするため役割分担をし、作業に勤しんだ。

私が担当したのは、ポスター作りと、事前挨拶、そして当日の仕事は板書であった。

ポスター製作には存外時間がかかったが、皆さまに気に入っていただけたようで何よりだった。

正直に言えば、今回のポスターの絵のデザインは、この教材に一度目を通し、ポスター製作の依頼を受けてから、ものの10秒足らずで脳にすっと浮かんだイメージそのもので、さほど深く考えてはいなかったのだが、本講義担当の先生方からは「教材をよく理解していて素晴らしい」とほめられ、嬉しくも恥ずかしい気持ちもあった。

事前挨拶は、当日のちょうど一週間前、潮見が丘中学校に直接出向き、授業をする3年1組と、先生方に挨拶をした。クラスの雰囲気も明るく、担任の安彦先生の助け船もあり挨拶自体はさほ

ど緊張せずできた。幸先よいスタートを切れたなと実感できた。

本番前の講義の時間では模擬授業を行ったが、それぞれのやり方に統一性がなく、結果論点がぶれたり結論がまとめられなかったりと悲惨だった。これを経て休日に集まりもう一度練り直す、といった課外活動も行った。私も板書に関して何も考えずやっていたところがあったので、猛省し、よく考え当日は臨もうと決心した。

そして来る本番。

まだまだあやふやな部分も多々あったが、泣いても笑っても今日が最初で最後の本番。

皆緊張に顔を強張らせながらも、特に授業者の芝田氏は期待に瞳を輝かせていたのが見て取れた。

そして授業が始まる。

何人かの生徒は快く反応してくれたが、多くが静かに授業を聴いていた。

プリントに記入する場面になると、他の授業者の面々も動き、生徒たちの様子を伺った。

金子氏が、メイン授業者である芝田氏に無言で出した

「この子、面白いこと書いてるよ」

のサインが非常に印象的だった。

生徒たちの意見は、ある程度予測できたものもあったが、我々の思いもよらぬ、非常に貴重な意見もたくさんあった。私はそれをなるべく一語一句違わぬよう記憶し、板書したところ、

「すげー！」

という声が生徒たちの間で上がった。

私は、生徒の意見をきちんと聴き、それを間違いなくきちんと記録してあげることがその生徒に対する礼儀であると思っているし、それが私にとって当然のことであったがために、この感嘆の声は予想外で、非常に嬉しかった。(尤も、それが「時間の使い方」という点で後の反省会にて改善点としてあげられたわけだが)

授業を一通り終え、ご来場いただいた教育委員会の方や他校の校長先生たちから講評をいただいた。そこでも板書についてほめられたのには、良い意味で頭が上がらない思いだった。

道徳教育において、唯一つの答えは存在しない。十人十色、30人いれば30の答えがある…。

ということを常に念頭に置いて授業を作り、それが正しいと思っていた。

だが、ある方からのお話に、

「答えはない。でも、授業者である君たちにとっての答え、自分の信念なんかをそっと教えてあげることは必要なのではないか」

というものがあった。

これは、私は薄々感じていたことだった。

しかし今まで道徳教育とは前述のような“答えのないもの”、という認識があったので、改めてそう指摘されると、目から鱗だった。

最後に職員室に行き、先生方に挨拶。

この時芝田氏が涙ぐみながらも立派に挨拶をしている姿を見て、私もすこし目頭が熱くなったのを覚えている。

今回の研究授業を通して、言葉にできない多くのことを学んだ。

きっと来年、再来年...この試みは続いていくことだろう。

例え「やらない」と言われても、私はこれを続けるべきだと思っている。

学生自らが授業を考え、教壇に立ち、何より、他の誰でもない、子どもたちの声を直に聴くということ。

それは、何物にも代え難い、貴重な経験だ。

私はこの大学に来て、このような経験をさせていただいたことに、心から感謝する次第である。

金子大軌 (広報全般及び授業の全体的な進行・調整)

今回教職チーム6人で行った道徳の授業はこの先一生できない経験となりました。

1つ1つの役割をしっかりと持ち、確実な行動に移せたと思います。

道徳の授業を体験してみて、机間指導だけでしたがとてもいい経験でした。もっと生徒と話す機会があればいいなと思っていましたが緊張していたせいか、なかなか話すことができませんでした。

3年1組の生徒は緊張からか発言が少ないように見受けられましたが、活発に発言する子どもも多く、授業を進めやすいように協力してくれた場面も多々ありました。

私は机間指導でみんながいろいろ書いているプリントを見ながらまわっていましたが、たくさん書いてある子もいればまったく書いていない子もいました。書き方がわからない子を適切に誘導してあげられればよかったと思っています。また、6人のチームワークなので、授業者のフォローにも回ることができました。

道徳という授業は答えが1つではないところがあるので「教える」ということが難しいことに改めて気づき、とても難しい科目の1つだと思いました。それが、中学校の教員になると本教科に加えプラス道徳ということになり、大変さが増します。その大変さを今回の道徳教育論で、どのようなことをするのか、教育基本法に沿っているか、その学年に対応していることなのか、指導案を書くといういろいろなことを経験できました。

道徳の教育実習は珍しく、ほかの大学では少ないと聞いています。中学校の教員になると絶対にやらなくてはいけない道徳が必ずしもうまくいっていないということも耳にします。ですから、稚内北星学園大学で道徳教育論を受講することはとても貴重でとてもためになる講義でした。

次に授業をするときはおそらく1人で授業をすることになるので、この道徳教育論で学んだ経験を生かし教育実習や今後の活動に役立て、素晴らしい授業にしたいと思います。

【資料9】稚内北星学園大学ホームページにアップした報告記事

3年 土生 勇

このたび、本学のお隣の稚内市立潮見が丘中学校で、道徳教育研究の一環として模擬授業を行うことになりました。教材は稚内北星学園大学教職課程の学生が執筆した作品で、題名は「人の

心の動き」です。

元稚内中学校の校長で、現在は稚内市教育相談所所長の平間信雄氏のご協力のもと、学生が一致団結して作り上げました。一般の方も歓迎いたしますので、興味がありましたら是非ご参加ください！詳細は、下記PDFファイルをご覧ください。

3年 金子大軌

私たちは、潮見が丘中学校にて無事道徳の授業を終えることができました。教職チームの6人で一致団結した授業はおそらく一生できるものではないと思います。また、私たちの授業を見に、20名近くの方々がお越しくださいました。稚内北星学園大学ならではのこの試みはとても貴重な経験となりました。

「6人が1つの授業を創る」

このことは、とても大切な時間で深く心に刻み込まれた体験でした。来年は現2年生の教職チームが道徳の授業を行います。私たちの授業を超える授業を期待しています。

おわりに

学生たちは、この授業を通して得難い体験をした。彼等は、自分たちが児童生徒であった時、教師がどのように苦勞していたのか、また、現在教職課程に学んでいて、いかに地域の方々に支えられているのかを改めて認識した。そこから周囲への感謝の気持ちが生まれた。前回も感じたことだが、この試み自体が学生の道徳性を豊かに育む機会となっている。

今回第2回目の「道徳教育論」授業を終えて、ようやくこの科目の基本的な枠組みを確立することができた。

学生たちは、「自作教材を創る」というこれ以上ないほどの難関のように思われた課題を達成した。あまつさえ、その教材から指導案を作成して、実際に中学校3年生の生徒たちに伝えるという一連の流れを経験した。この、敢えて高い目標を掲げることで行われた取り組みは、教育実習を次年度に控えた学生たちにとって、ひと足先に現場に携わる非常に良い機会となった。昨年度から始まった、授業の力にとどまらない実践力を育成する道徳教育授業の展開は、当初のねらいを越えた効果を表し始めたようである。教室内で行われる講義形式の授業だけでは到底達成されない貴重な学びを、学生たちは全身で受け止めている。このことは、学生たちの感想文から明確に読み取ることができる。

過去2回の「道徳教育論」を通して明らかになった幾つかの課題と向き合い、来年度の第3回「道徳教育論」を更に効果的な授業としたい。

最後に、このような取り組みは、37年間の学校現場経験をもって地域の方々の厚い信頼を得られて、かつ、すばらしいネットワークをお持ちである平間信雄氏のご尽力なしには実現不可能であった。

また、平間氏の呼びかけに応じ、ご多忙にもかかわらず、稚内北星学園大学教職課程の学生たちのために時間を割いてご指導を下さった多くの関係者の方々、本大学の教職員のご協力にも心から感謝を申しあげる次第である。

● 英文タイトル

Moral education class to promote the ability of the practice

Creating a "theory of moral education" in cooperation with regional partners No.2

● 要約

This report is the second report about new activities in the subject "moral education theory" in the teacher-training course that started last year. Mr. Nobuo HIRAMA, ex-principal junior high school, and I have been in charge of this class since school year 2009/10.

In Wakkanai Hokusei Gakuen University bulletin No. 10, 2010; Mr. HIRAMA published "Creating a 'theory of moral education' in cooperation with regional partners". This is the first report.

On this second report, I examined the management of the this year's class and made problems clear in order to manage the class for the next school year effectively.

● キーワード

Practical class

Visiting lecturer

Own teaching materials

Student teaching of "the morality"